学術情報ポータルサイトとしての Google

大坪真木子*

東邦大学医学メディアセンター

私たちの学術情報の入手方法は様変わりしてきている。以前は冊子体索引を引き、論文を探し当て、紙媒体の論文を複写していた。それから PubMed のようなオンライン上のデータベースや電子ジャーナルが現れた。現在はフリーアクセスのサイトも現れ、机上で文献検索から全文入手までできるようになり、情報の入手方法も様変わりしてきているようだ。

米 Google は2004年11月、学術論文検索用サーチエンジン「Google Scholar ベータ版(<http://scholar.google.com/>)」を発表した。論文、学位論文、プレプリント、書籍、テクニカルレポートを収録し、分野は医学に限らず多分野にわたり、横断的な検索が可能である。

関心のあるキーワードを入力すると、引用回数を元にあるロジックによって重要度を算出し、その順に論文などが表示される。しかしながらそのロジックは明確に示されているわけではないので、全面的に信頼できるまでには至っていない。キーワード検索の他に、「author:」の後に著者名を入力することによって論文著者を限定したり、フレーズを“ ”でくくることにより、そのフレーズを含む論文の検索も可能となっている。

表示される検索画面は、タイトル、著者名、雑誌名、発行年などの一部分である。タイトルにはリンクがはられており、それをクリックすると、PubMed の画面、全文を入手できるサイト、無料のアブストラクト画面、論文購入画面などにつながる。検索画面にはそれぞれ「Cited by」として被引用件数が表示され、その論文が他の論文にどれだけ引用されたことがあるかが示される。またそこをクリックすることにより引用している論文のリストが表示されるようになっている。また、「Cited by」の隣の「Web Search」というリンクをクリックすると、論文の中から勝手に著者名やキーワードを拾って「Google」の中で検索をしてくれる。さらに行頭に「Book」と示さ

れた検索結果にある「Library Search」のリンクからはオンライン・コンピューター・ライブラリー・センター (OCLC) の「World Cat」というデータベースに繋がり、所蔵している最寄りの図書館を示してくれる。

中には、[citation]と表示し、リンクがはられていない検索結果もあるが、引用をたどることによってほぼ芋づる式に情報を入手することができるといえる。

Google は、ほかにも書籍の内容を Google 検索で紹介する「Google Print」(<http://www.print.google.com>)を立ち上げている。出版社から送られてきた書籍をデジタル化して検索用インデックスに追加し、ユーザーが検索すると書籍本文の一部が見られたり、書籍販売サイトへとつながっていく仕組みだ。著作権の関係上、見ることはできるのは書籍本文の一部のみである。

さらにミシガン大学、オックスフォード大学、ニューヨーク公共図書館など5箇所の図書館の協力のもと、数百万冊の蔵書がスキャンされ全文検索できるプロジェクトも進行中だ。こうした動きに対して、出版社側は事前の話し合いが無かった事など、著作権保護の上でも問題があるのではとして警戒する動きもある¹⁾。

検索エンジンへのこうした機能の拡張により、Google は学術情報のポータルサイトを目指しているように見える。学術情報の検索エンジンとしては Elsevier 社の Scirus が知られているが、Google Scholar はこれに引用頻度分析と引用へのリンクという機能を加えて、Web of Science や Scopus のような検索を可能にした。ベータ版を名乗っている以上、立ち入った批判はできないが、少なくとも検索結果表示順のロジックは明らかにすべきであろう。そうする事によって、学術情報ポータルとして世に広く認められる可能性はある。また無料であるという点で、学術コミュニケーションにも大きなインパクトを与えることになるだろう。

引用文献

- 1) Butler D. Publisher irritated by Google's digital library. Nature 2005;433:446

*Makiko OHTSUBO: 〒143-8540 東京都大田区大森西5-21-16.
Tel. 03-3762-4151 Fax. 03-3764-1642
makiko@med.toho-u.ac.jp (2005年3月3日 受理)